

(このレーダーの性能は仙台のものより劣る) 4N, cm ほどの傾度がなければならぬと報告している。これは水蒸気傾度で 1mb/cm 程度の非常に大きな値である。しかし、このような変動量を観測できる器械がないので、はっきりした測定結果は出ていない。

以上のような点から、このエコーの成因は海風の侵入による、内陸の気塊との不連続面で生じた一種のエンゼルエコーであるといえることができる。

5. あとがき

今後の問題としては、この種のエコーは、仙台空港においても、顕著な海風が侵入することが確かめられているにもかかわらず、宮城県南部海岸沿いには、いまだに観測されておらず、このエコー発生のためにはどのような気象条件が必要なのか、また、9月1日の仙台、9月13日の石巻のように、エコー通過時にはっきりと海風に変ったものと、9月13日、10月23日の仙台のように、2次的な海風によりエコーが生じたと考えられるものがあるが、これはどういう状態で起るのかなどがある。これらの現象について調査を行なう機会があれば、このエ

コーからある程度海風の機構を知ることができると考えられる。

終りにこの調査にいろいろご指導いただいた浅田レーダー係長はじめレーダー係の加藤、山川の各氏、またここよく資料を提供して下さった石巻測候所に厚く感謝する。

参考文献

- 1) Atlas, D. et al, 1953: Observation of the sea breeze by 1.25cm radar, Proc. Conf. Radio Meteor., Art XI-6
- 2) Atlas, D., 1960: Radar detection of the sea breeze, Jour. Meteor., 17, 244-258
- 3) Ligda, M.G.H., and Bigler, S., 1958: Radar Echoes from a cloudless cold front, Jour. Met., 15, 494-501
- 4) Brown, H.A., 1960: Report on radar thin lines, Proc. 8th weather Radar Conf., 67-72
- 5) 久保田効, 1961: 宮城県における気温の統計的分析, 天気 8, 220-225

〔書評〕

血のかよった“山の気象”の本

新田次郎

恒星社刊 山の気象(2) 定価 680円, 175頁
山の気象研究会

山の気象についての本は登山に経験がある人が書いたもののみについて、その存在価値がある。いくらえらい気象学者が書いたとしても、炬燵で書いた“山の気象”なんてのはいただけない。うそはないだろうが、血が通っていない。

本書は山のベテランであり、気象学に相当頭をつつこんだ人たちが執筆したものであるから、読んでいて山を感じさせる、山の気象の本である。山へ行く人はこういう本を続いでいけば、また読まなくとも、この本を買おうとする意欲を見せただけでも、山の気象遭難からは、かなりの距離遠ざかることができるであろう。

内容はかなり広範囲に分れていて、第1章の上層天気図の見方と利用法は山へ登る人にはやゝ専門的に過ぎる感があるが、第二章の登山者のための天気予報は親切、圧巻は第3章山の気象記録であろう。東京白稜会千葉大

医学部山岳部、富士重工山岳部等の社会人山岳部が文字どおり、体あたりでかちえた山の気象記録は貴重である。第4章の山の気象研究の中の吉川友章氏の山岳地の気流の数値解析(1)は立派な学術論文であるが、あふるる若さと才智のみを駆使して、観念的推論となりすぎたうらみがある。山の複雑な地形と風との磨擦について、より多くの観測結果をもととして、もうひとふんばり努力したら、世界に類を見ない大論文となるだろう。

しかし、この論文が、あまりに学術的すぎるので、“山の気象”としての全体のバランスにおいては、少々重すぎる感がないでもない。この論文は、他のしかるべき発表機関へ載せるものではなかったかと思う。全体としてはすごく充実感があって、登山者必携の書となるであろうことは間違いない。山の気象第3巻の出版を期待する。(作家)